

ヘラクレスから金剛力士像へ



ギリシャ⇒オリエント⇒ガンダーラの仏教美術 ⇒シルクロード⇒日本の執金剛神(金剛力士)

ヘラクレスはギリシャ神話最大の人気者、「12の難行」を命がけでやり遂げ、オイテ山で焼死、父ゼウスにより神格化された。豪放磊落な豪傑という性格は誰にでも好まれるもので、アレクサンドロス大王の大東征(前334-前323)以降、ギリシャから遠く離れたオリエント世界でも大好評を博しました。ハトラ(イラク北部)はパルティア時代の隊商都市で商人たちが各地から集まり、人とモノ、情報が行きかうところ。ギリシャの英雄神はここでも崇拝されたのでしょう。

ヘラクレスの雄姿はガンダーラの仏教美術にも影響を及ぼします。ブッダの護衛、バジュラ・パーニという神がヘラクレスの姿で表現されました。用心棒は強くなければなりませんから、あの英雄の姿を借りたのです。

この神とブッダの姿はシルクロードを東へ進みます。東アジアでは執金剛神(金剛力士)とよばれ、更に日本まで到達したのです。寺院の山門を守る金剛力士つまり仁王さんです。



東方文化と融合し、普遍的性格を持つようになったギリシア文明を「ヘレニズム」と呼びます。

時期的にはアレクサンドロス大王の東征(前334年)から、ローマのエジプト併合(前30年)までを指し、地理的にはギリシア・マケドニアのほか、アレクサンドロスの東征区域を含む大規模なものです。

このヘレニズム時代に、ガンダーラ地方(現在のアフガニスタン東部・パキスタン北西部)で、仏教の中に古代ギリシア・ローマの神々が取り込まれていきます。

釈迦の隣にヘラクレスがいるではありませんか！？しかもすでに金剛力士像の面影さえも見て取れます。ガンダーラで仏教に融合したヘラクレスは、中国へと渡っていく過程で東洋的な意匠へと変わっていきます。

手に持っていた棍棒は金剛杵へ、ライオンの毛皮は甲冑の意匠へと原形を残しています。

「すべての道はローマに通ず」という言葉を想起せずにはいられません。
金剛力士の本身である執金剛神は、ヘラクレスだったのです。

